

## 第6節 合掌造りの成立過程

長岡造形大学名誉教授 宮澤 智士

### 1. 合掌造りの定義

みなさんこんにちは、宮澤でございます。今日は、合掌造りについてお話ししたいと思います。

まず、一番目の問題として、「合掌造りは何をもって合掌造りとするのか」ということです。

合掌造りの特徴として、開いた本を伏せたような三角形の茅葺<sup>かやぶ</sup>き屋根があげられます。切妻造りという屋根の形式です。同じ切妻造りの屋根ではありますが、五箇山・白川郷の地域でも少し変化があり、一見したところ入母屋造りに近いものもあります。

屋根の材料としては、茅です。茅葺き屋根。屋根を葺く茅には、ススキ、ヨシそしてチガヤなどのさまざまな草があります。茅葺きとは草で屋根を葺くことなんです。

合掌造りの形態として屋根の三角形が一番印象的な形ですが、こういう切妻屋根の民家は日本中を見ると、奈良盆地から大阪にかけての地域の大和棟があります。これも屋根の勾配はやや急です。また、屋根の勾配が緩いものとして、長野県の本棟造りがあります。それから神社では、伊勢神宮や出雲大社などもみな切妻造りです。合掌造りには、切妻造りという屋根の形と比較的急勾配で、茅を葺くという材料に特徴があります。

こうした合掌造りが造られた社会的背景として、五箇山・白川郷では浄土真宗の勢力が強い地域であるということです。合掌造りが分布している地域は、庄川上流域の山間部です。その範囲は南北約50km、東西約20kmほどの限られた地域です。

その範囲は、1つの文化圏が成立する範囲です。日本の場合はこの範囲を出ても日本語が通じますが、外国では言葉や文化が違うということもあります。そういうことから、合掌造りが分布している地域は、1つの文化圏を形成しているということが十分いえるでしょう。

浄土真宗が民家建築にも強く関わるという点で、合掌造りでは仏壇のある部屋が一番立派で、<sup>かみて</sup>上手に造られています。

次に、屋根裏、小屋裏ともいいますが、屋根裏を有効に積極的に使ったことが合掌造りの機能の大きな特徴です。この屋根裏を積極的に利用するようになった理由は、養蚕です。蚕を飼うために屋根裏を、どうやって広く有効に使うかということが課題であって、合掌造りが変化していく大き



第104図 荻町の冬景色

(合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会1996)



第105図 五箇山・白川郷の集落範囲 (1 / 40)

な要因になっています。

## 2. 合掌造りの研究

合掌造り民家の研究は、実は現在でもあまり進んでいません。日本のどの地域の民家でもそれほど進んでいません。だから、合掌造りがいつ頃にどのようにできたかということも明確になっていません。解らないのは別に合掌造りに限らず、日本の民家全般にもいえるかと思います。

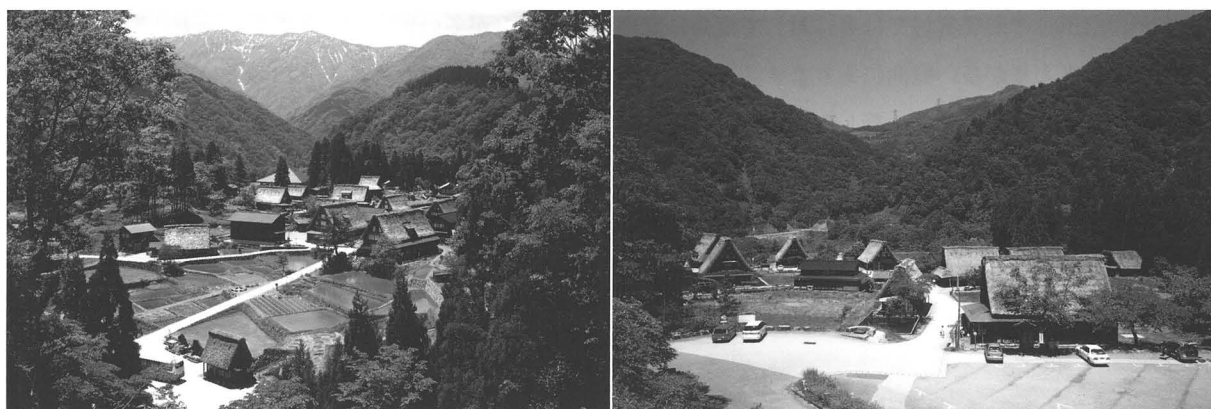
これまで合掌造りが所在する五箇山や白川郷を秘境だとか遅れた地域だという印象が強く持たれていました。ブルーノ・タウトというドイツの建築家が来日し、昭和10年（1935）に白川村へ来ています。白川村の遠山家を見て、合掌造りの構造が合理的であることに驚かれました。合掌造りをベタ誉めするわけです。タウトが誉めている代表的ものが、合掌造りであり京都の桂離宮です。そして、<sup>けな</sup>貶されたのが日光東照宮です。彼は、装飾が過剰な建築をあまり好きでなかったようです。

長い間、五箇山も白川郷も秘境だといわれてきましたが、江戸時代の日本には秘境という地域はすでにありませんでした。合掌が造られる時代は、江戸中期から昭和30年頃までの300年位の期間にわたりますけど、この時代ではもう秘境ではないのです。しっかり税金も取られていました。ただ冬になると降雪により陸の孤島になって、移動することが中々困難であった事実は確かにあります。

今では機械で除雪しますが、雪が降ったら大変だった昔は秘境であるとか、古くて遅れてる地域だといわれました。それは、明治時代以降に都会から研究や開発に五箇山・白川郷へ来た人がいったことであって、最初から五箇山・白川郷に住んでいる人は、秘境であるとは思っていなかったと思います。

## 3. 世界遺産合掌集落

世界文化遺産に登録されるのは、南砺市の相倉合掌集落・菅沼合掌集落、白川村の荻町合掌集落の3つの集落です。建物としては、茅葺き屋根の切妻造りが多く現存している点で共通しています。地域によって細部



第106図 南砺市の合掌集落  
左：相倉合掌集落、右：菅沼合掌集落

は異なるものもありますが、庄川流域の1つの文化圏の内にあります。

世界遺産に登録されている合掌造り集落範囲は、旧平村、旧上平村、白川村ですが、合掌造りが分布していた範囲は、南端は庄川の最上流にあって今は高山市になりましたが旧荘川村、白川村、それから北は五箇山の旧利賀村も含まれます。



第107図 昭和30年代の荻町（宮澤2005）

#### 4. 合掌造りの小屋構造

合掌造りを一番象徴的なものにしてるのが、前に  
もしばしば述べた三角形の茅葺き屋根です。この屋根裏を小規模な家では2層に、大きい家だと3～4層に分けています。1階は人が居住する場所ですが、屋根裏は養蚕をする場所で、人が住む場所ではありません。

昭和30年代の写真では、屋根裏の両妻面の壁はむき出しの丸太になっていて、そこにムシロを垂らしてふさいでいます。それがあある時期になると、現在みられるような板壁に変わります。妻の壁をムシロでふさいだ頃までは、屋根を造るのは大工ではなく村人が集まって合掌を作り、屋根を葺きました。だから、屋根と屋根裏の技術は村人の技術なのです。

合掌という言葉はいつから使い出したのかはよく分かりませんが、佐伯安一先生が紹介されました正保5年（1648）の「小瀬村久兵衛、家立につき持山の木伐取願」に「かつしょう」と記載されています（佐伯2006）。日本中ではここにてでくる「がっしょう」を「サス」（叉首）と呼んでいる地域の方が多いのですが、五箇山・白川郷のあたりでは古くから合掌と呼んでいたことが分かります。こうしたサス組の家は、日本中にあり、北海道のアイヌの家や屋久島や奄美、沖縄にも類似した小屋組があります。

もう1つの屋根の形として、京都・奈良・大阪など畿内とその周辺には、棟木を小屋梁と支えるために真束（棟束）で屋根を支える構造があります。「オダチトリイ」造りなどと呼ばれています。この構造は一般的に合掌組（サス組）より古く、世界的にみても古い傾向にあります。ただ、サス組も考えればすぐできるので、世界的にも結構古くから多くあります。合掌造りの屋根の形が三角に見える部分を妻というのですが、白川村や旧利賀村では妻に対して直角に家内へ入る平入が多い傾向があります。一方、五箇山は妻側から入る妻入りが多い傾向にあります。五箇山の合掌造りは妻入りのために入り口の上に庇を設け、茅屋根を葺きまわしますので、一見したところ入母屋造りにも見えますが、小屋組の構造を見ると実は切妻造りなのです。

屋根を葺く茅は、茅場を設けて調達するのですが、近年は良質な茅場が少なくなり、合掌造りが廃れる1つの原因になっています。

#### 5. 合掌造りの間取り

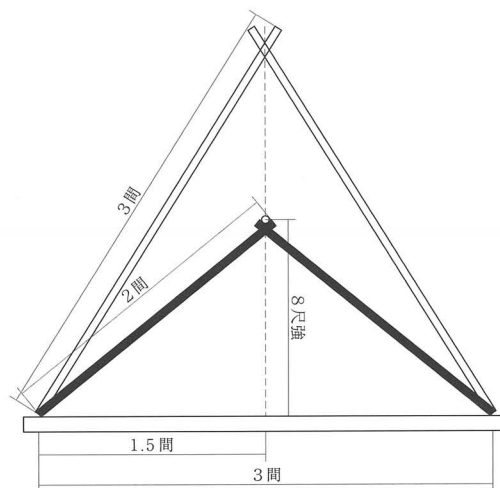
浄土真宗の家の仏壇が立派であることはよく知られています。皆さんのお宅も多分立派な仏壇を祀ってい

それでは「書院座敷」と「仏間座敷」とでは、形式的にどう違うかといいますと、もちろん「書院座敷」には床・棚・書院窓など座敷飾りがあり、「仏間座敷」は内陣などという仏壇の間を造り、そこに仏壇を構えています。このうち床・棚・書院窓などの座敷飾りの前面は開放されていて建具がありません。これに対して仏壇には扉があり、内陣の前には襖があって、開け閉めによって仏壇を座敷（仏間）から隠すことができます。この違いを皆さんは、特に気にしたことがないかもしれませんが、「書院座敷」と「仏間座敷」との大きな相違点です。「書院座敷」でない合掌造りでは、お祝いの時のなどは、仏壇の前の襖を閉めて、仏

— 143 —

間を普通の座敷として使うのです。

ところで、白川村荻町の和田家は、19世紀前半頃に建てられたと推定されていますが、この住宅は普通の入口とは別に客用の入口である式台があります。この式台から玄関にはいると仏間があり、その上手に客座敷があります。和田家の壁は板壁ではなく土壁にするなど白川村民家では特殊です。高山の大工が造ったことと関係しているのでしょう。



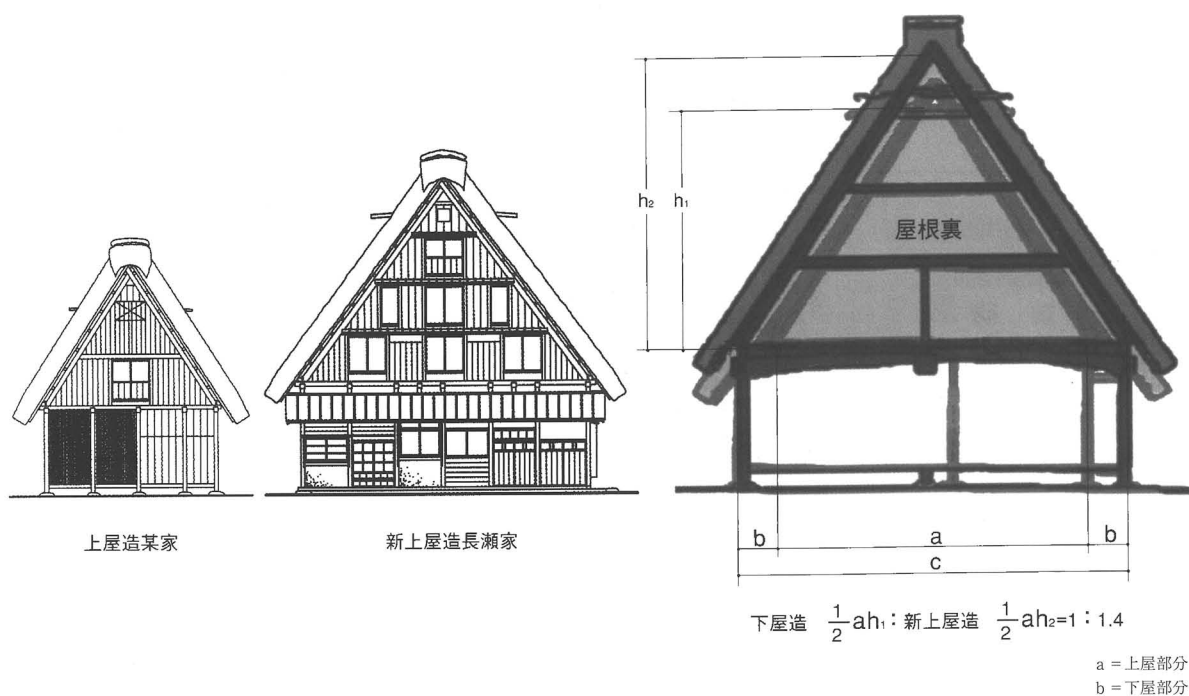
## 6. 合掌造りが成立する時期

合掌造りがいつ頃にできるかといいますと、屋根裏を養蚕などで積極的に活用する江戸時代中期、17世紀後半以降です。それ以来、昭和30年代までの約300年間使われてきました。合掌造りで一番古いのは南砺市田向にある羽馬家といわれています。合掌造り時代は約300年といいましたが、日本民家史全体から考えれば、ごく限られた期間になります。

先ほどは、屋根は村人が集まって葺くといいました。それでは、1階の人が居住する部屋部分は誰が造ったかといいますと、大工たちです。能登半島の付け根、現在の氷見市の一番北に長坂という集落があります。ここに江戸時代は大窪大工という大工集団がありました。その大工たちが合掌造りの居住部を造り、上の屋根の部分は村人の共同作業、ユイで葺いたということになります。

建物の小屋組の下部分を軸部といいます。合掌造りの人が居住する軸部は大工の仕事、屋根は村人の仕

第109図 小瀬村久兵衛文書による屋根勾配の復元  
黒塗り：小瀬村久兵衛家の屋根  
白塗り：新しい一般的な合掌造りの屋根



第110図 合掌造りの種類 (宮澤2005)

事です。屋根を造る作業は、村人が山から木を切り、合掌を造り、屋根葺きします。屋根の下の軸部の技術とは違った技術です。

そうすることで、合掌造りは大工の仕事と村人の仕事を分担して造ったことになります。私は、大工など職人の技術に対して、村人の技術を「中間技術」と呼んでいますが、合掌造りの屋根は、この「中間技術」によって支えられていたのです。

こうした村人の「中間技術」で小屋が造れるということは、作業小屋などの小屋が、合掌造りが成立する前にあったということでもあります。軸部がなく小屋組だけの住居「マタダテ」などと呼ばれる小屋も実際あります。

ただし、マタダテに柱や梁を導入して、だんだんと合掌造りの軸部ができたというような説を私はとりません。ある時期に他から導入されたしっかりした軸部があって、その上に茅葺きの屋根を乗せたり、あるいは板葺きの小屋組を合掌の小屋組に変えて、現在にみるような合掌造りは、ある時期に一気にできたというのが私の考え方です。つまり、合掌造りの軸部は能登大工なり他から導入された技術だと考えるのです。軸部を造っておき、ここに地面上で造った屋根をのせる例は、アイヌのチセ（家屋）にあります。合掌造りが成立した時期は17世紀後半の五箇山だったと考えています。

そこで、矢張下島遺跡で確認された掘立柱建物址ですが、柱の立つ位置は分かるが、屋根の構造までは分かりません。合掌造りは屋根に特徴があるので、これは私としても、この建物址が合掌造りであったかもしれないし、そうでなかったのも知れないという結論を出すしかありません。

佐伯安一先生が紹介しています小瀬村久兵衛が加賀藩に伐木の願いを出した古文書には、建築部材ごとにその員数と長さが記載されております。そこには、柱が25本、桁が5本、梁が7本、合掌が16本と記載されています。この文書が書かれたのは正保5年（1648）です。今残っている合掌造りに関する記録でここまで古いものはありません。また、現存する合掌造りも確認されていません。

この文書で注目されるのが、合掌と梁です。梁は長さ三間と書いてあります。三間の梁という長さは現在の合掌造りでも一番多い長さです。それから合掌の長さは二間と書いてあり、合掌に比べて1間短い。合掌が三間でしたら小屋組はほぼ正三角形の形になります。今みられる急勾配な合掌造りの勾配です。

正保年間には合掌造りがまだ成立してない時代だといわれています。この記録をもとに屋根の復元をしてみました。梁が3間で、合掌が2間ということで図を描くと、屋根勾配は9寸ほどになります。「9寸勾配」とは10進むところで9の高さになる勾配です。梁が3間（18尺）であると、高さは8尺強になります。角度



第111図 屋根裏での養蚕（宮澤2005）

は約42° ほどです。いまの合掌造りの勾配とくらべれば緩いですね。

しかし、茅屋根の屋根勾配を全国的視点で見れば、普通の勾配です。白川村の合掌造りでも、最近の屋根葺替えて勾配を急にする傾向が見られます。勾配を急にする理由は、急勾配の方が雨水が速くおち、茅屋根が長持ちするという理由からです。

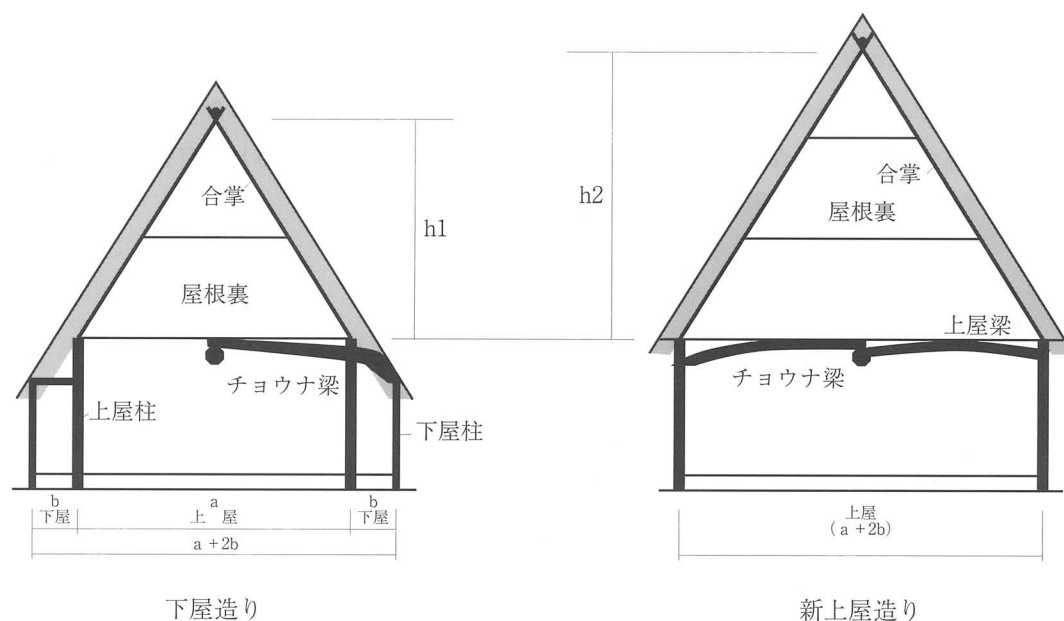
私は正保年間に合掌造りができていないとすれば、文書の屋根の勾配はこれでいいのではないかと考えています。

## 7. 合掌造りの空間

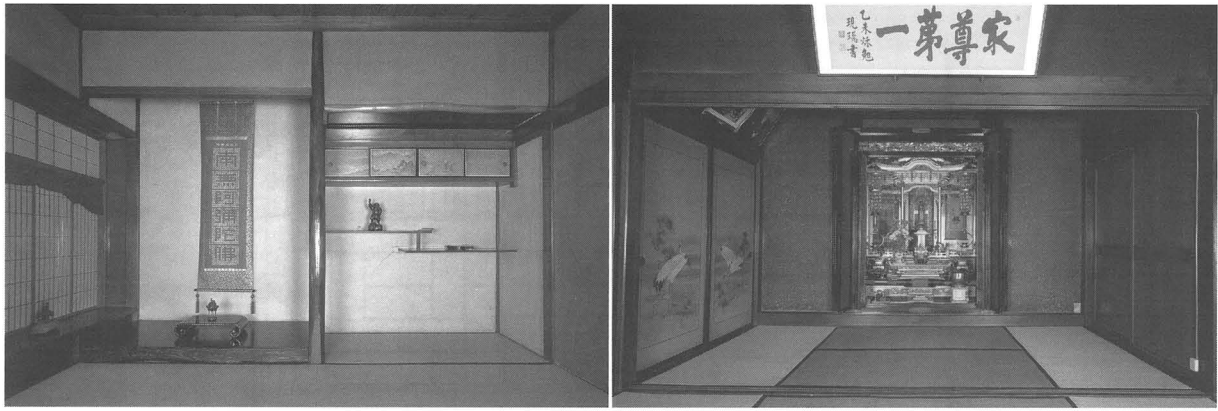
合掌造りの屋根裏をどうやって広くし、有効に使うか。1階は人が住む場所、屋根裏は蚕を飼っています。1階の軸組にはチョウナ梁という非常に大きい根曲りのある木材を使っています。こうした大きく立派な梁はおそらく江戸末期になってから使い始め、明治時代の初め頃までに普及したと考えています。チョウナ梁の名は、工具のチョウナの形に似ているからそう呼んでいるのです。このチョウナ梁の活用が屋根裏を広くし、有効に使うために大きくあづかっているのです。

合掌造りの軸部構造は、「上屋造り」と「下屋造り」に分けることができます。上屋造りは上屋部分のみからなっている構造です。これに対して下屋造りは、上屋部分の前後の2面に半間の下屋（庇）が付いている構造です。合掌の尻が乗っている範囲が上屋です。下屋造りの方が本格的な構造であり、古い羽馬家もすでに下屋造りになっています。

江戸時代末期に、下屋造りに変化がみられるようになります。屋根裏を広くするための工夫です。下屋造りの上屋梁を長くして、下屋造りを上屋造りに変えるのです。こうすることによって、3間である梁間は4間になります。上屋造りに変えても、小規模な上屋造りの家と違って、大きなチョウナ梁を巧みに使うことで、豪壮で堂々とした空間を演出したのです。この上屋造りを私はとりあえず、「新上屋造り」と名付けて、

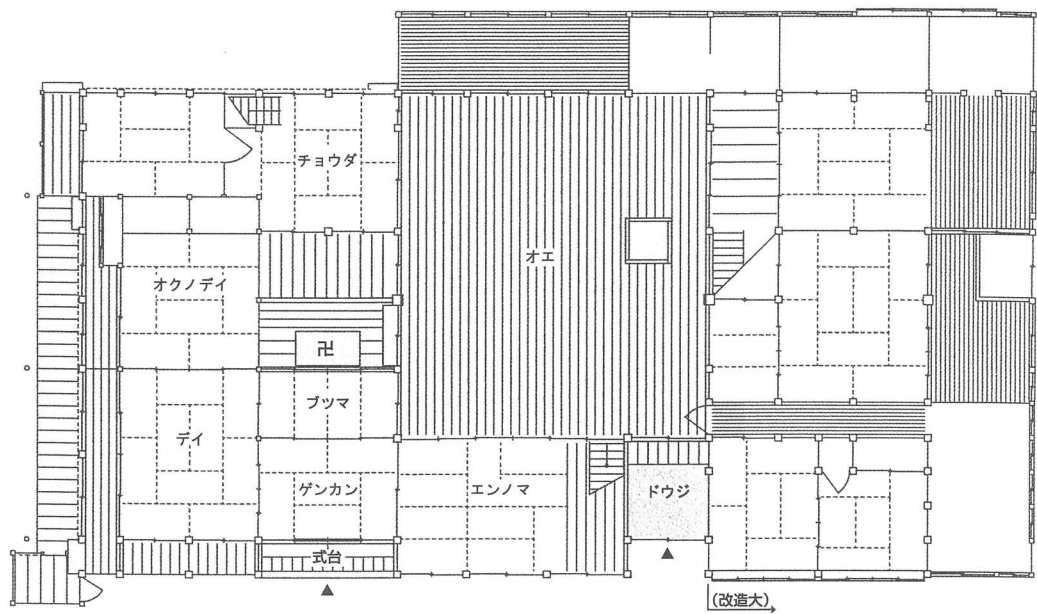


第112図 合掌造り構造模式図

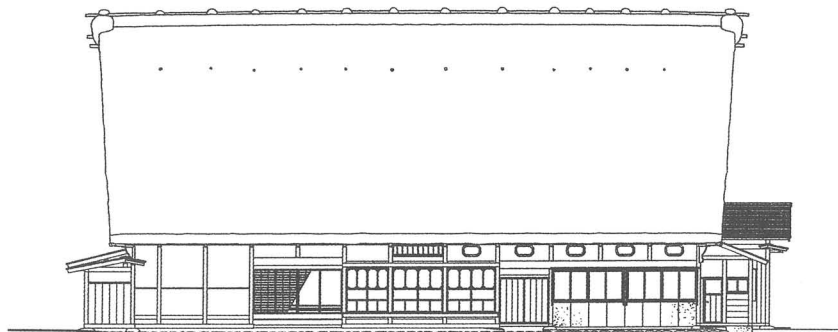


第113図 和田家の書院座敷と仏間（合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会1996）

左：書院座敷、右：仏間

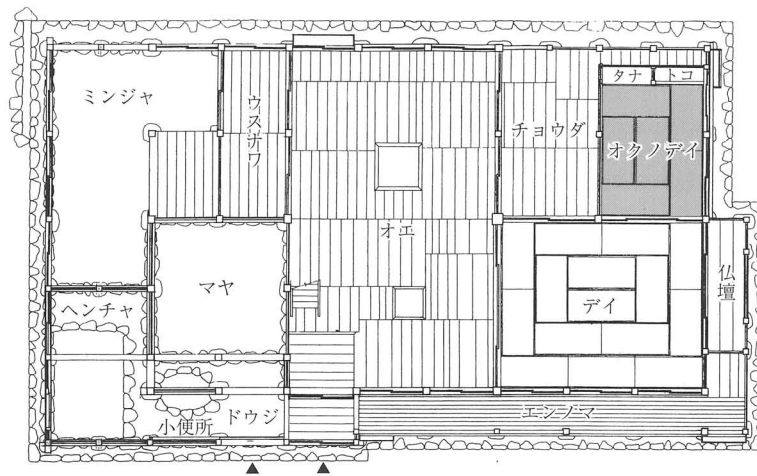


和田家平面図 1/200

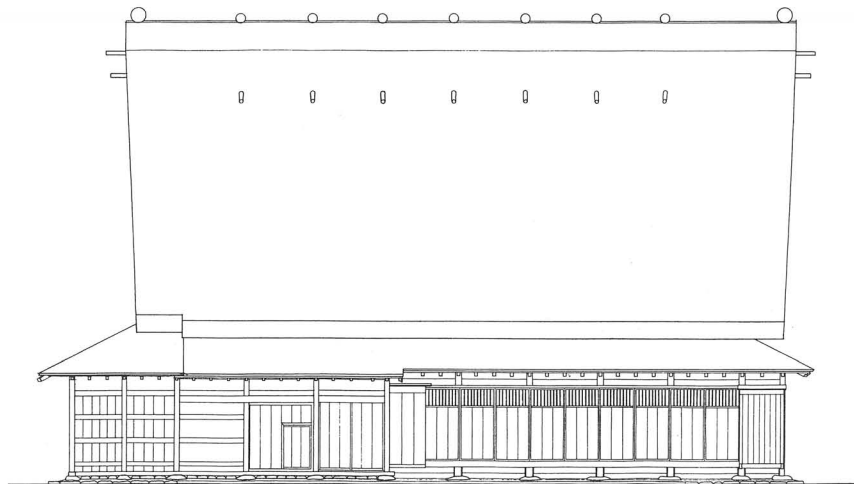


和田家正面図 1/300

第114図 白川村荻町和田家（宮澤2005）



平面図



正面図



上手側面図

第115図 旧中野長治郎家住宅（1／200）（宮澤編 2000）

小規模な建物に用いられている一般的な上屋造りと区別することになっています。そうして「新上屋造り」か、「下屋造り」かが、一見したところでは判別できない程の堂々とした空間を造ります。

さて、下屋造りから新上屋造りになって、上屋梁の長さが3間から4間に長くなると、軒の高さは高くなりますが、茅屋根の面積は変わらないのです。しかし、屋根裏の面積が広くなり、容積も大きくなります。その比はほぼ1対1.4になります。この関係を第112図に示します。

今では、大家族だから合掌造りは大きな家になったとは誰もいわないのですが、以前は一部でそう信じられていました。しかし、使われ方などを考慮すると、合掌造りの屋根裏の発達はやっぱ養蚕が要因です。せるということをしています。ですから上屋造りと下屋造りがちょっと見ただけでは判らなくなっています。

## 8. 丸釘と角釘

釘には丸釘（洋釘）と角釘（和釘）があります。丸釘は針金、角釘は鋼でできています。角釘は古くから使われています。それに対して丸釘を使い始め、普及するのは明治10年代（1877～1886）で、最初は輸入していました。日本で丸釘を製造するのは明治時代末期です。日本で丸釘を製造して、ほとんど輸入しなくなったのは大正初期になってからです。このことから、建物にどの釘を使っているかわかると建物のおおよその年代、明治10年代の前か後かということが判明します。白川村に安政年間（1854～60）に建築されたという家がありましたが、解体調査しますと使われている釘は丸釘ばかりでした。丸釘を使っていることから、明治10年代以後の新しい建物だと判ります。建築年代の推定には、いろいろ資料を吟味して資料批判などもしくはなりません。

私は、民家建築史を考える上で釘というものが非常に重要です。高が釘といえども、角釘から丸釘への変化は民家の近世と近代の境になると考えています。政治が変わったからといって建築は直ぐには変わらない。民家史の時代区分は政治史の区分をそのまま当てはめられないということになります。

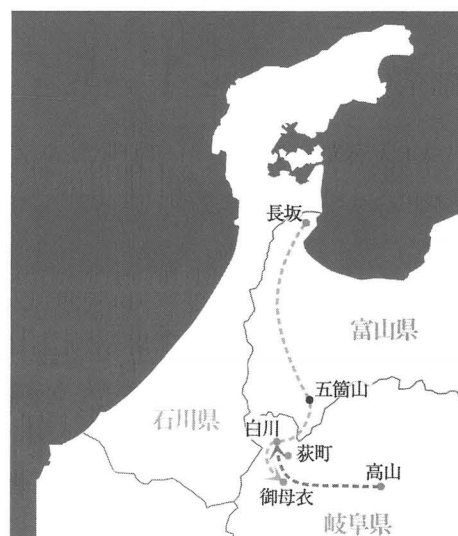
## 9. 大工の系譜

先ほど、大窪大工にふれましたが、大窪大工は氷見の長坂から五箇山を通り白川郷まで来ています。

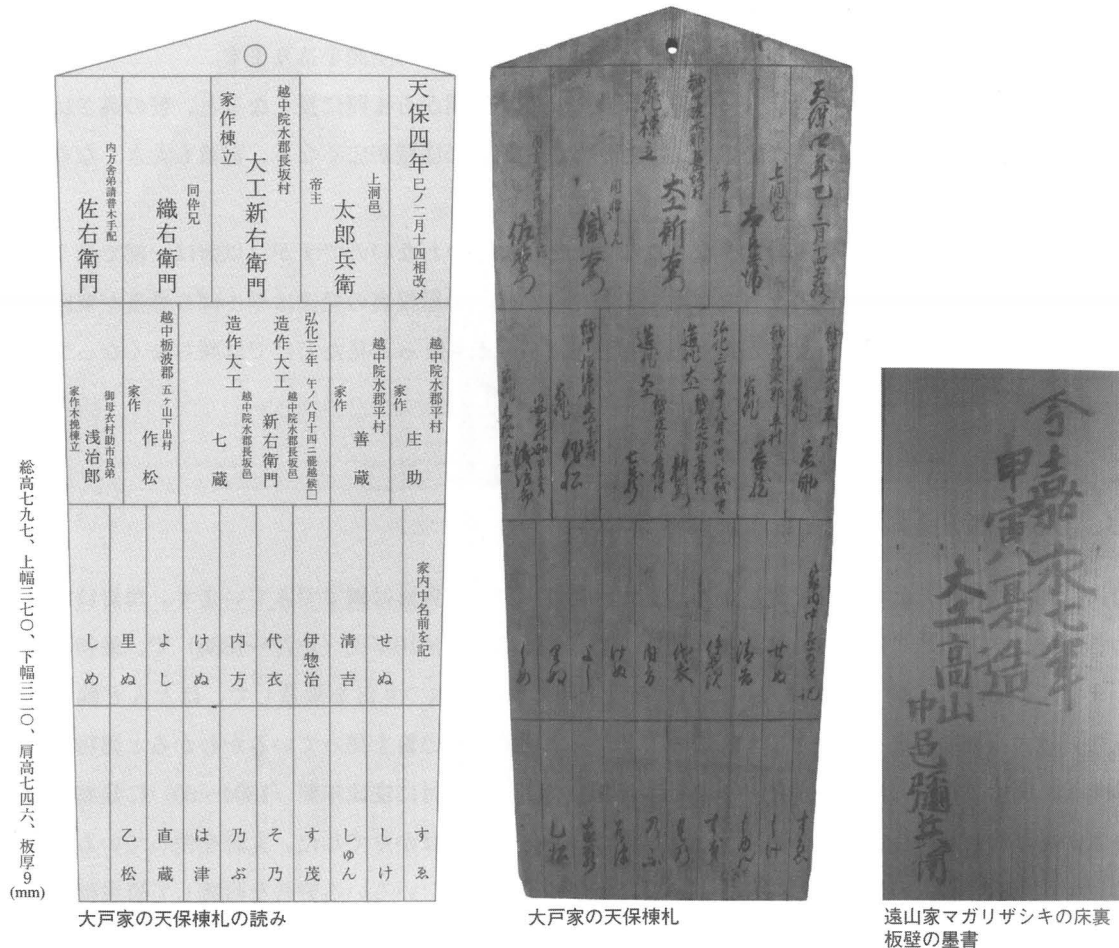
一方、高山大工が御母衣を通して白川まで来ています。その終点が荻町の和田家であったり、明善寺の庫裡だったのだと思います。

白川村御母衣にある大戸家の棟札には、天保4年（1833）に「越中院（射）水郡長坂村大工新右衛門」をはじめとする大窪大工が建てたことが記してあります。

また、同じく御母衣にある遠山家の僧侶控え室であるマガリザシキの床の間の裏板に「今 嘉永七年 甲寅夏造 大工高山 中邑彌兵衛」と記した墨書があります。このことから、遠山



第116図 大工の系譜（宮澤2005）



第117図 大戸家の棟札と遠山家の墨書（宮澤2005）

家の母屋は文政（1818～1830）以前に建てられ、嘉永7年（1854）の改造にあたって僧侶控え間を造ったと考えられます。床の間を造った大工は高山から来ているのです。

#### 参考文献

- 合掌造り集落世界遺産記念事業実行委員会 1996『世界遺産 白川郷・五箇山の合掌造り集落』
- 佐伯 安一 2006「五箇山・白川地方 合掌造り民家成立私考」『とやま民俗』No66 富山民俗の会
- 宮澤智士編 2000『合掌造りを修復活用する』（財）野外博物館 合掌造り民家園
- 宮澤 智士 2005『白川郷合掌造Q & A』 智書房